
世界を渡り歩く転生者

緋月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界を渡り歩く転生者

【Nコード】

N5305R

【作者名】

緋月

【あらすじ】

子供を助けて死んだ青年、ながさわ長沢 すぐる傑は、様々な世界に転生していく・・・

始まり（前書き）

第一作が途中だけど第二作です。

始まり

？「あれ？ここ・・・どこだ？」

俺、ながさわ長沢 すぐる傑はなぜか真っ白な部屋にいた。

たしか俺は交通事故で死んだはずだ。

なのに何で意識があるんだ？

？「あ、あのゝ？」

傑「ん？」

気が付くと、そこには子供がいた。

その子供は真っ白だった。

だが目が異様に紅い。所謂アルビノというやつだ。

? 「あの・・・」

今まで無視されて辛かったのか、目の端に涙が浮かんでいる。

傑「つと、す、すまん!! 話を聞くから泣かないでくれ」

? 「ホ、ホント・・・ですか？」

傑「ああ本当だ。だから泣かないでくれ」

こちらの言葉を信用してくれたのか、涙を拭いて笑顔を浮かべている。

傑「で? 俺に何の用だ？」

? 「あっ?! そ、そうでした。実は・・・」

—
—
—
—
—
—
—

傑「ふ〜ん。まあつまりはこういう事か？」

この子供は交通事故で俺が助けた奴で、そのお礼がしたいそうだ。

傑「でもお礼って言ったって何をするんだ？」

？「え〜っと、貴方を転生させます！」

傑「・・・は？」

あまりの出来事に開いた口が塞がらなかった。

傑「・・・マジ？」

？「はいっ！マジです！」

傑「そんなこと出来るのか？」

？「？ ええ、出来ますよ？」

傑「じゃあさ、・・・・・・・・ってことは？」

？「もちろん出来ますよ」

傑「おおっ！ありがとなっ！」

頭をゆっくり撫でていく。

？「え、えへへっ／＼／＼」

それが気持ちいいのか、目を細めている。

傑「（まるで猫だな・・・）」

手を離すと、残念そうな顔になり、こちらに罪悪感を与えてくる。

傑「（我慢、我慢だ俺！！）」

？「?」

傑「と、ところで俺はどこに行くんだ？」

？「えっと、・・・・・・・・ですね」

傑「いろいろとありがとなっ！えーっと？」

？「僕のことはレンって呼んでください」

傑「そっか。じゃあレン、行ってくる」

レン「はいっ！いってらっしゃい傑さん！」

そうして俺は光に吞まれて逝った。

傑「（ん？字が違ったような？・・・気のせいかな？）」

始まり（後書き）

〈後書き部屋？〉

緋月「はいどくも作者の緋月です」

傑「（何だここ・・・？）主人公の傑です」

緋「記念すべき二作目です」

傑「二作目って、おいおい・・・一作目がまだ途中じゃないか」

緋「堅いこと言うなよ。原作がまだプレイ中なんだから」

傑「なら最初からこっち書けよ」

緋「あれは勢いで書いたからな」

傑「このダメ作者め・・・」

緋「お前まで俺をけなすか・・・」

傑「当たり前だ・・・って、なんか光がこっちに向かってきてるぞ」

緋「ちよっ、待っ」

緋「ぎゃああああああああっ?!?!?!?!?!」

傑「（今のって向こうの主人公の攻撃か?・・・容赦ねえな）」

レン「作者が退場したようなので、これで終わります。みんなまたね〜!」

緋「こっちでも俺はこんな扱いか・・・ガクッ」

異世界（前書き）

地震・・・大変だったなあ、
と思いながら投稿！

異世界

傑side

みなさん初めまして、主人公の傑です。

さて、俺が何をしているのかというところ――

傑「絶賛落下中だこんちくしょおおおおおおおっ?!?!?!?!」

光が消えたと思ったらはるか空の上。あとは重力に引かれて落ちるだけ……ほら、わかりやすいだろ？

傑「ってこんなことしてる場合じゃねえ?!?! 出てこい魔道具!」

俺がレンに用意して貰っていたのは『烈火の炎』の魔道具だ。

傑「えーっと、『鉄丸』じゃなくて……『風神』でもなくて……
おいおい、なんで『光界玉』まであるんだよ……」

危険すぎるだろうが・・・

傑「あった！『飛斬羽』だ！」

『飛斬羽』を発動させると腕から羽が現れる。

危なげながらもなんとか着地に成功した。

傑「これは練習する必要があるな・・・」

そう言って俺は辺りを見回した。

傑「来ちまったんだな、異世界に・・・。さて、これからどうしようか・・・」

そう、ここは俺の全く知らない場所だ。下手に動くと危険すぎる。

傑「とりあえず町を捜そうか」

目的が定まったので歩き出す。

――――

傑「よ、ようやく見つけた・・・」

捜すこと三時間、やっと村らしきものが見えてきた。

村に入ると俺は人のよさそうなおばさんに話しかけた。

傑「こんにちは」

おばさん「こんにちは。ここらでは見ない顔だね、旅の人かい？」

傑「ええそうです。地図はありませんか？道に迷ってしまって・・・」

お「いいよ。えーっと、どこにしまったかねえ」

ここで俺の容姿について説明しよう。今の俺は紅麗になっている。

俺が頼んだ『竜之炎』はなぜか『柳』もいる。

移動中に話しかけられたから驚いた・・・

お「あった！これだよ」

地図が見つかったらしい。この話はまた今度だ。

お「こここの所があたしらの村だよ。ちっちゃな村だけどね・・・」

傑「いえ・・・私は平和でいい村だと思います」

お「ほんとかい？あんた優しいんだね」

傑「本当のことですよ。地図、ありがとうございました」

お「気にしなくていいんだよ！またおいで！」

傑「もちろん。それでは・・・」

おばさんと別れた後、俺はどうしようか考えた。

あ・・・ちなみに今いる世界は『メルヘヴン』だ・・・って
か作者が同じじゃん。

・・・まっ、いいか！それよりこれからどうしようか・・・

異世界（後書き）

〈後書き部屋？〉

緋「次話投稿した緋月です！」

傑「傑です。停電したのに投稿して大丈夫か？」

緋「心配してくれてありがとう・・・しかし問題ない」

傑「ところで『メルヘヴン』の世界だけどいいのか？」

緋「たぶん大丈夫じゃないか？」

傑「どこからその自信は来るんだよ・・・」

緋「さあ？・・・さて、ここらで終わるか」

傑「（あ・・・また光が）」

緋「ん？・・・って、ぎゃああああああああつ？！！！！！！！」

傑「あゝ、これで終わります。みんなまたね」

緋「前にもこんなこと・・・あったよう、な・・・」

カルデア（前書き）

この話から傑↓紅麗となっていくます。

では、どうぞ！

カルデア

傑↓紅麗side

前回から三ヶ月ほど経って、俺はその間修業をしていた。

途中、盗賊に襲われたが返り討ちにした。

『竜之炎』の竜の一匹、『虚空』によると俺の肉体が紅麗になったわけじゃなくて、俺が紅麗に憑依したらしい。

・・・だから『紅』もいたのか・・・

さらに『虚空』によるとその内肉体に精神が引っぱられるらしい。

俺が紅麗に近くなっていくってことか？

それでも俺は俺だ。それ以上でもないしそれ以下でもない。

傑↓紅「（・・・まっ、どうにかなるさ）」

ああ、そういえば俺が今どこにいるか説明してなかったな。今いるのは――

？「貴様は何者だ！！ここはカルデア――侵略のつもりかっ！！」

――――カルデアだ

紅「いや、そのつもりはない」

門兵「ならば何用だ！！掟により他国の者は入れん！！」

紅「カルデアの頭領に伝えて欲しい。『異世界人』が来た、と。私はまた明日、ここに来る。・・・ではな」

俺の言葉に門兵は呆然としている。

呆然としている今の内に俺はその場から離れた。

??? side

門兵からの言伝じゃがどうしようかの・・・

??? 「しかし『異世界人』か」

向こうは侵略の意志がないようじゃ。それに門兵が言うには魔力を感じなかったとか・・・。

??? 「なんの目的で来たのか聞く必要がありそうじゃの」

もし、何かしようなものならカルデアの民に魔法で殺されるだけじゃ。心配はなからう・・・

紅side

さてと、どうなるかな・・・

門兵「貴様か・・・大ジジ様から【特例として迎え入れよ】、と言われている・・・妙な真似はするなよ!!」

紅「わかった。感謝する・・・」

門を抜けるとカルデアの民が大勢いた。様々な視線が突きささる。敵意、好奇、猜疑など本当に様々だ……。

門兵「ここから大ジジ様のところまで『アンダータ』で移動する」

紅「ああ」

門兵が指輪を取り出し、魔力を流し込んで俺達は跳躍した。

――
――
――
――
――
――
――

俺達は空中に浮遊する大きな城に降り立った。

門兵「大ジジ様の命令だ。ここからは一人で行け……くれぐれも粗相は起こすなよ!!」

紅「了解した。気をつける」

そう言い残して俺は城に入った。

さて――

――交渉開始だ！！

カルデア（後書き）

〈後書き部屋？〉

緋「毎度おなじみ緋月です！」

傑「傑です。・・・なあ作者、俺が紅麗になるってことは口調とかも変わるのか？」

緋「ああ。一人称が『俺』から『私』になっていくぞ？」

傑「へえ〜。じゃあ『傑』が出て来るのは後書き部屋だけになるのか？」

緋「そうだ。それ以外は基本『紅麗』になる」

傑「（あっ・・・今度は剣が飛んできた。向こうの主人公ってすげえな〜）」

緋「ごふうっ??!?!」

傑「え、作者がグロいことになったので終わります……みんな
たね」

緋「こ、『黒鍵』はねえだ……ろ」

主人公設定（※4月2日更新）（前書き）

主人公設定です。

STATUSは力、精神力、知能、スピード、潜在能力です。

魔力については後々、徐々に増えていく方針です。（最終的にはチートです。）

主人公設定（※4月2日更新）

〈転生前〉

NAME…長沢 傑ながさわ
すぐる

AGE…24

HEIGHT…173 cm

WEIGHT…62 kg

BLOOD TYPE…A

STATUS…ALL・D

EXPLANATION…交通事故で死んだ青年。ルックスはそこそこよかったためひそかにモテていた。職業は医者で腕がよく、「期待の新人」と言われていた。助けられるのならばどんな危険を冒しても助けようとする優しい性格。

—
—
—
—
—
—
—

〈転生後〉

NAME…紅麗^{くれない}

AGE…20

HEIGHT…UNKNOWN

WEIGHT…UNKNOWN

BLOOD TYPE…UNKNOWN

STATUS…ALL・EX

EXPLANATION…転生後の傑。レンに様々な能力を貰っている。その一つが『竜之炎』。さらに『紅』『柳』を宿している。時折、冷たい心をもつ。

SKILL…

『瞬間演算』

『高速演算』の上位スキル。その名の通り瞬間的に演算できる。

『道具作成』…A

人の手で作ることができる最高傑作を作れる。『Fate』の魔術礼装や魔道具、ARMも含まれる。

『心霊医術』

患部を氣で直接治すことができる医療技術。傑が生前欲しかった能力。

『肉体変化』

年齢を0～20まで変えることができる。精神も少しだけ肉体年齢

に引かれる。

『剣術』…B+

才能と努力で取得したスキル。我流なのでまだ荒いところがある。

『気配遮断』…A

発動すれば触れられるまで気付かない。サバイバルで取得した。

※後々更新していきます。

主人公設定（※4月2日更新）（後書き）

〈後書き部屋？〉CLOSE

緋「今回の〈後書き部屋？〉はお休みです」

PV2, 000突破記念アンケート(前書き)

PV2, 000突破およびユニーク500突破です！

ありがとうございました！

※アンケートの1、2は『異世界』『カルデア』の間です。4とCは同じなのでどちらでも構いません。

PV2, 000突破記念アンケート

傑「あれ？なんだこの空間？」

緋「傑！！緊急事態だ！！」

傑「ど、どうしたんだよ緋月・・・そんなに慌てて」

緋「これが慌てずにいられるかつ！！！！いいかよく聞け、実はな・・・」

傑「・・・ゴクッ」

緋「・・・PVが2, 000を突破したんだ！！！！」

傑「・・・な、なんだってえ~~~~っ??!!!!」

緋「と、いうわけでアンケートをとります」

傑「いきなり冷静になるなっ！！！！」

緋「うるさい。これからカルデアの後の番外編とか幕間をどうしようか聞くんだから黙ってる！！・・・ついでに方針も」

傑「うっ、わ、わかった・・・（なんか聞こえたような・・・）」

緋「では次の中から選んでください」

1. 修業の間（傑の女難）
2. 修業の時の出会い（原作キャラフラグ）
3. レンの休日
ほのぼのになります
4. カルデアでの日常
オリキャラフラグ
5. その他

緋「この中の一つを選んで感想に書き込んでください」

傑「ちょっと待て！！あきらかに俺に何かがあるじゃねえか！！！！！！」

緋「主人公だからな」

傑「もういやだ・・・」

緋「諦めろ傑。それがお前の運命だ」

傑「そんな運命いやだーーーーっ!!!!!!!!!!!!!!」

緋「次はカルデアの後の方針です」

A. 次にギンタのそこ（原作開始）

B. 次にルベリア（ナナシ）

C. まだカルデア（幕間）

D. 作者に任せる

緋「から選んでください。あ、それとヒロインの募集をします（他作品も可）。オリキャラの場合は詳細も付けてお願いします」

緋「締め切りは3月20日の 20時ちょうどです。みなさんありがとうございました！」

PV2, 000突破記念アンケート（後書き）

〈後書き部屋?〉

緋「本文の付け足しです。ARMの説明を後書きで入れた方がいいですか?それと後書きにレンも呼んだ方がいいですか?」

傑「そちらも感想で答えてくれたら嬉しいです」

交渉（前書き）

前回の付け足し

- ・他作品からヒロインを出す場合は作品名もお願いします。
- ・感想をくれたら更新が早くなるかもしれません。

交渉

紅麗 side

城に入りしばらく歩くと、大広間に着いた。

そこには黒い衣を纏った老人がいた。

紅「ご老人。この度は私を迎え入れてくれたこと、感謝する……」

大ジ「よい。お主の言っていた『異世界人』という興味深い言葉に話を聞こうと思っただけじゃ」

紅「それでも、です」

大ジ「わかった……して、このカルデアに何の用で来た？」

偽りは許さない……か。

紅「ご老人。『チェスの兵隊』^{（兵隊）}という存在を知っていますか？」

大ジ「うぬ。5年前に戦火を灯した者達じゃな。して、それがどうした？」

紅「はい。実は・・・『チェスの兵隊』が動き始めました」

これは事実だ、前に盗賊に襲われたとき紛れ込んでいた。

大ジ「なんと・・・それは誠か？」

紅「ええ。そこで・・・カルデアに力を貸して貰いたいのです」

大ジ「だが我等が力を貸す理由がない」

それについてはすでに考えている。

紅「ならばチェスの持つ魔力のあるARMを持って来ましょう」

大ジ「なんじゃと？」

紅「メルヘヴンにある魔力をもつARMはここで創られたのでしょ

う？魔力をもたないARMは普通の彫金師でも造れますからね」

大ジ「・・・正解じゃ。だが今はドロシーが集めてくれておる」

紅「その者が一人でチェスを相手にARMを集められると本当にお
思いですか？」

大ジもわかっているようで黙りこくっている。

紅「ですので、私はその手伝いをするというのはどうでしょう」

大ジ「・・・わかった。我等も協力しよう」

紅「ありがとうございます。ああそれと家を用意して貰えませんか
？」

大ジ「わかった。空き家があるのでそこに住むといい。後で案内さ
せよう」

紅「重ね重ねありがとうございます」

交渉は成功だ！さて、これから何をしようかな・・・

交渉（後書き）

〈後書き部屋？〉

緋「作者の緋月です！」

傑「主人公の傑です」

緋「久々の後書き部屋だー！！！」

傑「2回も休みだったからな」

緋「junya1976さん、感想ありがとうございます！！！！努力させていただきます！！！」

傑「よかったな、感想が貰えて」

緋「初めての感想だからな。今回はこれで終わります」

緋・傑「またね」

出会い（前書き）

ついに原作開始！・・・な話です。

出会い

紅麗side

カルデアに滞在してから1年近く経った。その間私はカルデアの民にARMの彫金を習ったり、『修練の門』で修業したりしていた。・
・さすがに魔力を高めすぎたようだ。ARMを創るとハンパない物ができる。

そろそろ原作が始まるので旅立つことにした。それを皆に伝えたと全員が残念そうな顔をしていた（特に女性）・・・なぜだ？

門兵「あんたが居なくなると寂しくなるな」

紅「私はまた戻って来るよ、ジム」

門兵「ああ、またな！」

こうも惜しまれると嬉しいものだ・・・さて、行くか。

— — — — —

カルデアを出てから私は原作開始のギンタが現れた草原に向かっていた。

紅「（この辺りだったか？）」

さて、ギンタが来るまで待つとすー

??? 「なあ、あんたここがどこか教えてくれるか？」

——もういたのか。

紅「ああ、構まわない。だがその前に名前を覚えてくれないか？」

ギンタ「俺の名前は『虎水ギンタ』、よろしくな！」

・・・やはりギンタだったか。

紅「私の名は『紅麗』と言う。ここがどこかだったな、ここは『メルヘヴン』という君の居た世界とは別の世界だ」

ギ「・・・」

？
どうしたんだ？

ギ「す」

紅「す？」

ギ「すっげえー！ー！！あんたなんで俺が別の世界から来たってわかったんだ？」

・・・原作知識なんて言えるわけがない・・・

紅「君の服はこちらのものではないようなのでね・・・それと私が君と同じ『異世界人』だからかな」

ギ「あんたもあの変な門でここに来たのか？」

紅「いや、私の場合は違う。私は別の方法で来た」

ギ「へえ〜どんな方法か教えてくれよ」

紅「それはできない。私の一族の秘術だからな」

ギ「ええ〜」

紅「秘密だ・・・そろそろ行くか」

ギ「なあ、あんたに着いて行ってもいいか？」

紅「・・・いいだろう、着いて来い」

ギ「やった！」

・・・僅かだが魔力を感じた。・・・まさかドロシーか？

side out

??? side

？」「・・・ふう、危ない危ない気が付かれるところだった。それにしても子供の方は大したことなさそうだけど・・・」

男の方・・・あれはマズイ。かなりの実力者だ・・・

？」「まっ、いざとなったらトトもいるし・・・大丈夫かな？」

出会い（後書き）

〈後書き部屋？〉CLOSE

傑「今回は作者の都合で休みです。ではまた次回にでも・・・」

魔女との遭遇（前書き）

ドロシー登場！

魔女との遭遇

紅麗 side

ギンタと出会ったときからつけられている・・・恐らくドロシーだ。

どうやら私が居ることで向こうを警戒させているようだな・・・

紅「ギンタ、ここで休憩だ。私は食べられる物を探してくる」

ギ「だったら俺も・・・」

紅「お前は何か食べられるか知らないだろう・・・」

ギ「うっ・・・」

紅「だからここで休んでいろ」

ギ「・・・わかったよ」

・・・さて、お手並み拝見だ。

side out

— — — — —

ギンタ side

俺は虎水ギンタ。

普通の中学生だったんだけど、変な門に入ったら憧れてたメルヘンみたいな世界に来ちゃったんだ。

そこで初めて出会った人が黒い服を着た『紅麗』って男だ。

紅麗は会ったときから普通じゃないって感じがしたんだ。

でも怖いって感じはしなかった・・・なんでかな？

しかもなんだかんだで優しい・・・だから着いて行こう！って思ったんだ。

んで休憩してろって言われたんだけど、大して疲れていないから何もすることがない。

ギ「暇だなく。探険でもしたいんだけど紅麗に何言われるかわかんないし・・・」

そのとき――

――ギシッ

ギ「な、なんだアレ・・・」

鎧がこっちに向かって走って来た。

ギ「イキナリ何だお前は――っ!!」

俺は走って来た鎧を受け止めたんだけど、そいつは軽かった・・・だから――

ギ「こなくそーっ！っ！」

――投げ飛ばした・・・って、あれ？こんなに力あったっけ？

――パチパチパチ

？「やるじゃないボウヤ」

ギ「あんた・・・誰？」

ドロシー「ドロシーよ。はじめまして」

そう言うのと鎧の方へ歩いていった。

ド「うむっ・・・壊れてはいないね」

そしたら鎧が指輪になった・・・って

ギ「すげえーっ！！何それ！？」

ド「？ 君、ARM知らないの？ドコの田舎者よ・・・」

ギ「日本の東京ってトコから来た！」

ド「・・・聞いたコトないわね（見たところARMも身につけてない。私の『リングアーマー』を素手で投げ飛ばしたってコト！？大人もそんな事できないはずなのに・・・でもこの怪力は使えるかも）」

？「ギンタ・・・その女は誰だ？」

俺がドロシーと話していると食べ物を抱えた紅麗が戻って来た。

s i d e o u t

紅麗 s i d e

紅「ギンタ・・・その女は誰だ？」

私は何も知らないフリをして近づいた。ドロシーがマズイって顔を

している。

ギ「ドロシーって言うんだ！ドロシー、こっちは紅麗だ！」

紅「よろしくドロシー」

ド「よ、よろしく・・・（マ、マズイわね、どうしよう・・・敵意もなさそうだし乗ってくれるかしら？）」

ギ「あっ！？紅麗、そういえば何でARMのコト教えてくれなかったんだよ！！」

紅「説明しなかったのはお前が落ち着いて話を聞くような状態ではなかったからだ」

ギ「むう・・・」

図星だったのか少し唸っている。

紅「ほら、いつまでもむくれるな。これを食べたらさっさと行くぞ」

そこで私はドロシーに向かってリンゴのような実を放った。受け取ったドロシーは私に訝し気な視線を向けてきた。

紅「いらないのなら食べなくても構わない」

ド「・・・ありがたういただいとくわ」

ギ「紅麗！！これすげえうまいな！！」

紅「・・・もうなくなりそうだな」

食べるのが早すぎだ・・・

ド「・・・ねえ？」

紅「何だ？」

ド「これからARMを探しに行くんだけど・・・手伝ってくれない？」

・・・バツボか

紅「・・・いいだろう。別に行くところもないしな」

ド「ふふ、ありがと（無愛想だけど、結構優しいじゃない）」

紅「・・・何を笑っている」

ド「べっつに（素直じゃないんだから）」

紅「・・・まあいい、行くぞ」

ド「ま、待ちなさいよ!!」

こうしてドロシーと共にバツボを探しに行くことになった。

魔女との遭遇（後書き）

〈後書き部屋？〉

緋「緋月です！」

傑「傑です」

緋「次でやつとバツボが出るよ・・・」

傑「長かったな」

緋「ああそれとヒロインだが・・・ハーレムにしよう」

傑「・・・は？」

緋「だからハーレムだよ」

傑「・・・俺に死ねと？ただでさえ『柳』と『紅』の仲が悪いってのに」

緋「主人公だから仕方がない」

傑「それで済ませんな!!!!!!」

緋「もうこれ決定事項だから」

傑「ふざk「ボウツ」あ、あの柳さん? 紅さん? なぜに炎を出しているんでせう?」

柳・紅「・・・(メラメラ)」

傑「ちくしょーっ!! 不幸だーっ!!!!!!」

緋「・・・リア充め・・・っと、みなさんまたね」

バツボ（前書き）

ム、ムズカシかった・・・

バツボ

紅麗 side

前回からドロシーと一緒にバツボを探しに行くことになった。

今はドロシーの地図を頼りに辿り着いたわけなのだが――

ド「コラぁー！ーっ！！！！まってなさいって言ったよオ！！」

ギ「だってここ洞窟だろ！？きっと宝物があるんじゃない？」

ド「私が最初に入りたいのー！ーっ！！！！」

――――どうしてこうなった・・・いや、元はと言えばギンタが暴走したせいなのだが。そろそろ止めるか・・・面倒だが。

紅「大人しくしろギンタ。もし罠に引っかかっても助けてやらないぞ」

ギ「ちえっ、わかったよ紅麗」

幸い、ここがまだ洞窟の入口だからよかったが・・・奥だったら命の危険があった。

しばらく奥の方へ進むと、壊れたA R Mの残骸やら食料のゴミを発見した。

私は壊れたA R Mで直したら使えそうなものを探すことにした。

紅「二人とも先に行ってくれ。私は使えそうなものを探しておく・
・すぐに追いつくからそんな顔をするな」

なぜ二人揃って不安そうにするんだ・・・

ド「はあ、わかったわ。でもすぐに来てよ」

紅「ああそうする。気をつけて行けよ」

ギ「おう！紅麗も気をつけろよ！！」

ド「ちょっ！？待ちなさいって！？」

ギンタがまた暴走しているがドロシーがなんとかしてくれるだろう。

それにしても意外と使えるようなARMがあるな・・・盗賊の中にも結構なARM使いがいたようだ。

・・・時間をかけ過ぎたな、急ごう。

—
—
—
—
—
—
—

あと少しで最深部だ。原作で大丈夫だったとはいえどうなるかわからない、無事だといいが・・・

？「きゃああああああああっ？！！！！」

！？今の悲鳴はドロシー！！イレギュラーがなければいいが・・・！！

s i d e
o u t

ドロシーside

私の名前はドロシー。カルデアの魔女だ。私は『バツボ』って言う未知のARMを探しに来ただけだ――

ド「（ううゝ、ヨユウ・・・出しすぎたみたい）」

今は『バツボ』を守っているガーディアンARMに捕まっている。

こんな状態じゃARMが使えない、ボウヤも打つ手なしみたいだし、クレイも来てないし・・・アレ？これってピンチ？

ド「（だ、誰か助けて！！！）」

？「何をしている・・・」

ド「ク、クレイ!？」

そこにいたのはクレイ。だが、さっきと雰囲気全然違う。

その顔を彩るのは優しさを感じさせない怒りの表情。

辺りには冷たい炎に包まれたかのように撒き散らされた殺気。

紅「そのデカブツ、ドロシーを返してもらおうぞ・・・」

そう言って紅麗は印を切っていく・・・

紅「竜之炎式式、『碎羽』」

その瞬間、クレイの背後から『竜』が現れた。魔力は感じないがそ

れでも強力な力を感じる。

ド「何、アレ・・・」

アレは魔法でもARMでもない、それしかない・・・

ド「（クレイ、あなたは何者なの？）」

そしてクレイは一瞬でガーディアンに近づくと、腕から現れた炎で斬り裂いた――って!?

ド「き、きゃああああああっ?!?!」

そう、私はガーディアンの腕に捕まっていた。だから落ちるのは必然だった。

――――ポスト!

・・・いつまでも衝撃がやって来ない? どういうコト?

紅「・・・大丈夫か？」

ド「え？」

閉じていた目をあけるとクレイの顔が目の前にあった・・・え？

こんなにもクレイの顔が近いのはおかしいと思い、自分の体勢を確かめると――

――私はお姫様抱っこをされていた。

私は混乱から覚めると自分の顔が赤く染まるのを感じた。

こんなコトされたのが初めてだったからだ。

ド「（け、結構いいかも・・・）」

自分を抱っこしてるクレイはどう見ても美男子だ。ならば嬉しくないはずがない。

紅「すまないが下ろすぞ」

もう少し堪能したかったけど、私はクレイの腕から下りた。

ド「（これは私・・・惚れちゃったかな？）」

今でも胸がドキドキしているのがわかる。

ド「（だったら私を惚れさせた責任、取ってもらうんだから！）」

だからクレイ、覚悟してよねっ！

side out

紅麗side

くっ、やはり紅麗になるといっても傑の意識は僅かに残っていたか・
・確かに傑であれば見すごせなかっただろうからな。

紅「ギンタ、バツボはあったか？」

ギ「あるにはあったんだけど・・・」

紅「？　どうした？」

ギ「コイツさっきから動こうとしないんだ」

面倒なことになったな・・・

紅「とりあえずバツボについては任せた。すぐにここから出るぞ」

ギ「えゝ」

紅「・・・わかったか？」

ギ「了解しましたっ！！」

とつとここから出るか・・・

— — — — —

？「いやじゃいやじゃいやじゃいやじゃあーっ！
こいつのARMになるのはイヤじゃあーっ！！！」

私たちは今バツボと対面している。

ド「な、何よこいつ！」

バ「お前からは邪悪な魔力がプンプンしとる。さわられたくもないわ！！」

ド「私のはあんたを探してはるばる・・・「ドスン」・・・ちよつと
まってボウヤ！！君こんな重いモン運んだの！？」

ギ「もてないならバツボちよーだいドロシー！！」

バ「ちなみにワシ、大きさは変えられるが、重さはかわらんぞー」
(ニヤニヤ)

ド「ボウ・・・君、名前は？」

ギ「ギンタ！！！」

ド「ギンタ。その生意気なブサイクは君にあげよう！ただしそれをもっているいろいろな奴に狙われると思う。生きているウエポンARMなんてレア中のレア。みんな欲しがるはずだから」

ギ「ホントにもらっていいのか！！？」

ド「いいのよ、それに・・・収穫はあったしね！」

ち「やっぱりもってきていたか・・・」

ド「クレイ、助けてくれてありがとう」

紅「気にするな。私が勝手にやっただけだ」

ド「（最後までホント素直じゃないんだから・・・）またねっクレイ、ギンタ！」

そう言うどドロシーは箒に跨がって去って行った。

ギ「なあ紅麗？これからどうするんだ？」

紅「そうだな・・・この世界を見てまわるか？」

ギ「賛成！！！」

こうして私たちはメルヘヴンを見てまわることにした。

バ「ワシを無視して話を進めるなーーーーっ！！！」

バツボ（後書き）

〈後書き部屋？〉

緋「お久しぶりの緋月です！」

傑「お久しぶり、傑です」

緋「戦闘描写って難しかったんだな」

傑「小説を嘗めてるからこうなるんだ」

緋「うるさいこのフラグ建築士！！！」

傑「テメエがそういう風にしたんじゃないか！！！！」

緋「・・・まあいい、それで今回はドロシーフラグな話だ」

傑「そのせいであの二人のご機嫌取りだ。トホホ・・・」

緋「傑は無視して・・・ユウトさん感想ありがとうございます！」

傑「その感想が励みになります」

緋「今回はここまで」

緋・傑「みんなまたね」

PV10, 000突破記念番外編（前書き）

PV10, 000突破してから大分経ちましたけど突破記念番外編です！

そして傑がまたフラグを・・・

PV10, 000突破記念番外編

レンside

みなさんはじめまして、僕の名前はレンです！これでも神様なんです！

今僕は傑さんを転生先に送って一息ついているところです。

レ「傑さん、大丈夫でしょうか・・・あの世界は原作とは似通った世界なんですけど・・・」

そう、傑さんの行く世界は原作と似ていても違う世界だ、僕には原作の世界に転生させる程の力がないから・・・

レ「どうか無事でいてください傑さん・・・」

————ドタドタドタツ！！

レ「ん？」

——ズサア——ッ！！

? 「レン！！！」

レ「な、何ですかアリアさん……」

ア「あの男は?!」

レ「す、傑さん、ですか？」

ア「そうよ!!」

レ「もう行っちゃいましたよ」

ア「えっ?・・・お、遅かった・・・orz」

えーっと、この人はアリアさん、天使の一人で僕の友達です。僕のことを呼び捨てなのは僕がそう呼んで欲しいと言ったからです。

レ「す、僕さんに用でもあったんですか?」

ア「少し・・・ね」

レ「(すっごい落ち込んでるなあ・・・)あゝ、もしかしたら会えるかもしれませんよ?」

ア「っ!?!? どういうこと!!! すぐに教えなさい!!!」

レ「わ、わかりました・・・最高神様から許可を貰えば会いに行くことができますよ?」

ア「・・・あっ、忘れてた」

最高神様の許可があればたいいのことは許されるのは基本事項の
はずなのに・・・

レ「・・・では、最高神様は僕に甘いので僕が貰ってきますね」

ア「いつてらっしゃい（やった！！これで追いかける！！）」

傑さん・・・ご愁傷様です。僕には止められません・・・ごめんなさい。

side out

アリアside

はじめまして私の名前はアリア。レンが最高神様の許可を貰いに行っただけど・・・

ア「（レンって結構黒いときがあるわね・・・）」

なぜかレンはたまに黒くなることがある・・・理由は知らない。

ア「でも、もうすぐ会えるんだなあ傑さんに・・・」

私が傑さんに会いたいのには理由がある。それは――

――

ア「はあ、下界で研修とかやってらんないわよ」

天使は下界で人間について一年間勉強しなければならない、という規則がある。

ア「人間なんか知って何の意味があるっていうのよ。面倒ね、さつさと終わらせよ・・・」

――ドーンッ!!

? 「イッテェー!! なにしやがるんだテメェ!!」

ア「(マッヅズ!! ガラ悪いのにぶつかっちゃった・・・研修中だから人間に攻撃できないし)」

チンピラ「ん？よく見りゃけっこうカワイイ顔してんじゃん！オマエちよつとこれから付き合えよ！！」

ア「ちよつと？！触らないでよ！！（ああもう、見てないで誰か助けなさいよ！！）」

もうだめだと思ったそのとき――

？「お前、何してやがる・・・その子から離れろ！！」

チ「ああ？なんだテメエは？邪魔してんじゃねえぞコノヤロウ！！」

ア「（あ、危ない！！）」

助けようとしてくれた男の人が殴られそうになっている。私はすぐに助けようと思ったけど――

？「遅い・・・」

——バキッ!!

チ「ぶべらっ!?!」

ア「・・・え?」

男はチンピラの拳を避けると、チンピラの顎にカウンターを決めた。チンピラはその一撃で気絶したようで、男はそれを確認すると私の方へ歩いて来た。

?「なあ、ケガはないか?」

ア「・・・え、ええ。ケガはしてないわ」

?「そっか・・・よかった・・・」

私の無事を確認すると、本当に嬉しそうな顔してくる。その笑顔に私は顔を背けてしまった。たぶん私の顔は今赤くなってる、絶対なってる。

?「なら早くここから離れるぞ」

ア「え、ちょっ、ま、待ちなさいって!!」

男は私の手を掴むと走り出した。

〽離脱中〽

?「ここまで来れば・・・って、大丈夫か?顔が真っ赤だが・・・」

ア「だ、大丈夫よ。何でもないわ・・・」

?「ならいいんだが・・・」

ア「(しっかりしなさい私!!人間に手を握られたからって動揺してどうするの!!平常心、平常心・・・)」

?「よしっ!もう大丈夫そうだな、俺はもう行くから」

ア「(!? まだお礼も言っていないのに!?)ち、ちょっと待って!!・・・あ、ありがとう／＼／＼」

？「お礼なんていいんだが・・・ま、どういたしまして」

ア「あ、あと・・・」

？「ん？何だ？」

ア「な、名前を教えて・・・／／／」

？「まあいいけど・・・俺は長沢 傑。君は？」

ア「アリア・・・アリア・ローライト」

傑「アリア・・・か、いい名前だな」

ア「！？ あ、ありがとう・・・／／／」

傑「？ それじゃ、縁があつたらまた会おうな」

ア「あ・・・行っちゃった・・・」

私はそこで彼が行ってしまったことを残念に思っている自分がいることに気が付いた。

ア「（なんだろ・・・この気持ち・・・）」

私はさっきまでの彼との会話を思い返すと、胸が暖かくなってきた。

ア「これって・・・恋、なのかな？」

人間なんて・・・と思っていた私がたった一時間前に会ったばかりの人間に恋をしてしまった、それが今でも信じられない。でも・・・

ア「（この暖かさは・・・悪くない・・・）」

彼のことを思うこの気持ちは、心地いい。だから・・・

ア「もう一度・・・会えないかな？」

彼は縁があったら、と言った。でも私には、絶対に会えるという確信があった。なぜかはわからないけど、そんな気がした。

—
—
—
—
—
—
—
—

だから私はもう一度傑さんに会いたい。

ア「傑さんに会ったら何をしようかな・・・？」

今から考えると、とても楽しみで、わくわくしてる自分がいた。

ア「絶対に逃がさないからね、傑さん♪」

PV10, 000突破記念番外編（後書き）

〈後書き部屋?〉

緋「お待たせしました、作者の緋月です！」

傑「みなさんお久しぶり、主人公の傑です」

緋「PV10, 000突破かあゝ。実感がわかないんだよなあゝ」

傑「確かに。でもこんな小説を見てくれる人がいるっていうのは嬉しいな」

緋「感想ではマリィ愛してるううう!! さん、結愛羅さんありがとうございました!」

傑「そういえばレンって神様なんだよな？」

レン「呼びましたか？」

傑「うおっ!?! いきなり現れるなよ・・・まあいいや。レンは神様

なんだろう？どのくらい偉いんだ？」

レ「5段階だと4位ですね」

傑「結構下なんだな」

レ「ええそうですよ」

緋「おい、そろそろ終わるぞ。せーのっ！」

緋・傑・レ「みなさんまたね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5305r/>

世界を渡り歩く転生者

2011年10月7日06時40分発行